

# 貨幣の價值と數量説

大野純一

本稿は Dr. Karl Kirmaier 著 Die Quantitätstheorie, Jena, 1922 中 Vom Geldwert の一節を譯出したものである。忠實に『貨幣價值に就いて』と題す可きであるが便宜上本題に改めたことを御断りして置く。蓋し該著より引離された内容はそれによつてより明白に窺ひ得るからである。

吾々は目標に従つて、先づ貨幣價值の本質性に進まう。が此處に、制限を設け、以後の叙述に重要なるもののみを觀察するであらう。

貨幣價值換言すれば貨幣の客觀的交換價值の問題に關しては、論者の隊伍を三班に分けることが出来る。其一派は、貨幣は必然に素材價值を持たねばならぬ、と主張する。即ち貨幣が一般的交換手段たることは、貨幣は評價に基く財の交換を可能ならしむと言ふことであつて、貨幣は此職能を營むが故に價值の尺度となるのである、而して、價值の尺度たる貨幣は、必然に其自身價值を持た

ねばならぬ、何となれば、其自身價值あるものにして初めて價值の尺度たり得るからである、とする。——Knies, Menger, Lotz, Dichi 等の襲名する金屬主義の立場。彼等にとつて、賣買は交換の高次の形式に過ぎない。賣買に於ける心理過程は交換の其と何等異なる所がない、即ち與ふる財も受くる財も共に雙方の當事者によつて評價されると考へる。されば、Knies は、『經濟財の價值は、貨幣即ち貨幣片によつてではなく、貨幣の價值即ち一定重量の貨幣片に含む價值量によつて、測定せられる、』<sup>(5)</sup>と言ひ、Dichi は、私有財産と自由競争に基く今日の國民經濟にあつては、比較商品として其自身價值を持つ價格財が存在しなければならぬ、<sup>(6)</sup>と言ふのである。Dichi は、生産者は買好きの消費者に對し『吾々の商品に幾何を下さいますか、例ば金の如き、一般向きの對象で評價して下さい、』<sup>(7)</sup>と勧誘し得なければならぬとする。故に金屬主義の見地よりすれば、交換手段並びに價值尺度たる職能は、貨幣に於ける實體價值の必然性を要求するのである。吾々は、有價值なる貨幣財を要求せんとする此基礎付けの中に、金屬學說固有の規範を見出し得る、と信ずるものである。彼等は、交換手段としての貨幣は同時に價值の尺度である、然るにメートルは其自身長さを有するが故に尺度たり得るが如く、其自身價值を持つものにして初めて價值の尺度たるが故に、貨幣は價值を持たねばならぬ、と考へる。惟ふに例へば Bruno Moill も亦全く他種の金屬主義者である、

何となれば、彼は『終極の問題』から同様の要求をなすに至つたからである。言ふ迄もなく、彼の考へは次の如くである、即ち經濟人は貨幣の中に終極的充足を庶幾する、然して此庶幾は（世界の無限の問題は形而上學的なるも、貨幣の問題は常に社會科學的なるが故に）社會の解散に際しても尙、經濟人は貨幣の中に價值ある財を所有し、社會的生産物の分配に與かり得る、と言ふことに存しなればならぬ、と。<sup>(4)</sup>

貨幣價値の論争に於ける第二斑は、素材價値の必然性は否定するも尙素材價値なき貨幣に價值性を認めんとする論者によつて構成される。此即ち職能價値論者である。彼等によれば、貨幣に於ける價值性は、其職能即ち貨幣が賣買により個人的慾望を充足し得る可能性より生ずるのである、職能は言はゞ價值實體なりとする、Heyn, Helferich, Simmel, v. Mises, Grunzel, v. Wieser, Kichiro Soda 等は此派に結合する名前である。Heyn によれば、貨幣にあつても亦有用性と稀少性は價值の根源である、<sup>(5)</sup>貨幣の有用性は、直接消費或は生産に充用せらるゝ財に對し、交易に充用し得る可能性の中に存し、稀少性は、先づ第一に貴金屬産出の自然的制限の中に、次には貨幣の造出が國家的規定に従ふと言ふ事實の中に存すと言ふ。Helferich は、財の價值一般を職能の價值なりとし、<sup>(6)</sup>貨幣以外の財も亦、一定の機能によつて直接（消費）、間接（生産）人間の慾望を充足するが故に價

値を有す、とするのである。此派の論者は、價值を決定するものは、素材ではなく職能であると言ふとによつて、貨幣が、素材價值を超越せる職能價值を持つ事實を説明し得る、と信ずるのである。Döring が其著『クナップ以後の貨幣學說』に於て商品學說と名ける此二學說に對し、絶對に貨幣の「價值」を否定せんとする學說が極端なる對立をなす、彼等にとつては、貨幣が價值を持ち得ると言ふことは、考ふるを許さぬ事柄である。Knapp, Bendixen, Elster, Liefmann の名は此に屬するであらう。此學派は、價值は財の性質ではなく人間の心裡に存在する即ち價值は慾望充足に關する財と人間との關係に基くと言ふかの心理的經濟觀の意味に於てのみ、貨幣の價值を否定せんとするものではない。此種の貨幣論的見解は、心理的或は物質的經濟觀の論争には關係せぬ。財は物的性質として價值を持つとするも、尙貨幣は價值を持つことは出來ぬであらう、彼等の觀察によれば、貨幣概念と價值性とは全然相容れぬ、『經濟の他の側面』たる貨幣は、價值なき現象であり、従つて價格を持たぬ、而して如何なる財も、貨幣として、職務を營むや否や——而してその間は——經濟の意味に於ける財たることを停止するに至るとする。指圖論者は、賣買は本質上單に交換の高次の形式ではないと觀、<sup>(8)</sup>賣買の心理に於ても亦其見解を確證せんとするのである。即ち交換に於ては雙方の財が評價せられるが賣買に於ては一財のみが評價され貨幣は評價されぬ、此場合貨

幣は評價の對象ではない、『其自身』評價されはしない、蓋し貨幣は財ではないからであるとする。此見解よりすれば、金屬貨幣にあつても尙貨幣、貨幣實體は評價されるものでない。

故に此學說によれば、結局貨幣は價值を意味するが決して價值を持つものではない、而して此價值意味は、貨幣其自身から持つものではなく、貨幣がその時々で購入し得る財貨の量から獲得するのである、とは言へ職能價值學說の意義に於てではない。此購買力、Ester の用語に従へば分配力、は通常貨幣の『價值』と稱せられるところのものである、Bendixen は曰ふ、『貨幣は凡てそれによつて購買し得るもの、價值を持つ、』<sup>(9)</sup>『而して貨幣價值と名くるものは、吾々の知る物價より構成された一種の反映觀念に過ぎぬ、』<sup>(10)</sup>評價は、商品論者と指圖論者、金屬主義者と名目主義者の分岐點である、——直觀即ち認識の發端其自身に於て合致せぬ限り——言語を以つて此處に架橋することは出来ないのである。

吾々にして若し文献を通觀するならば、實際的理由からは兎も角貨幣と財との結合を提唱することあるも、素材價值性を貨幣の本質に屬せずとする學說が到る處に勝利を博しつゝあるを容易に確認するのである。而して職能價值學說と指圖學說との間には非常に多くの接觸點が存し、兩者は互に相接近するが故に、前者は思想的結構によつてのみ貨幣に價值性を證明せんとする、と言ふこと

を事實上認め得るのである。而して其は、貨幣に對し價值論を應用するが爲めの組織學的理由からか、或は又內的強制、——非分析的にして印象を單純に受納する人間は常に所謂貨幣價值の或觀念を持つと言ふ否定し得ぬ事實と、財の價值の意味に於て貨幣の價值を云々し得ずと言ふ科學的認識とを結合せんとすること、から生ずるのである。

貨幣價值の本質に關する明確なる見解がもし數量說に對し大なる重要さを欠くならば、吾々は貨幣價值本質の論争に觸れずにをくことが出来るであらう、然し乍ら、此が觀察は以後の敘述を非常に容易ならしむるが故に、尙しばし是非共此處に留まらねばならぬ。

吾々の考ふるところを以つてすれば、貨幣に素材價值あるを要せぬと言ふことは、素材價值なき貨幣の存在する事實によつて證明されるのである、LON は、紙幣は貨幣ではない、紙幣制度は變態である<sup>(11)</sup>と言ふも、かく簡單たるを得ない、若し彼が『自由私鑄の金屬本位の下にあつては、吾々は金屬主義者である、然して、變態の場合の爲に常態の場合を不完全なりとするが如き貨幣の定義は放棄しなければならぬ』<sup>(12)</sup>と言ふならば、此に對し科學的批評は向けられぬ。吾々は、紙幣は——金屬貨幣と同様に物價に影響する以上——貨幣なりと觀る、只紙幣に於ては、Simmel が貨幣の觀念化と名くるものが顯著に現はれて居るのである、<sup>(13)</sup> Soda が振替貨幣に於て從來貨幣が達した最高

の形式を見出す限り、<sup>(14)</sup>吾々は彼に全然同意するのである。

職能價值論者 Simmel 並びに Soda は誠に深刻なる叙述を以つて貨幣の非價值性と其具體的現象とを指摘する。されば、Simmel は貨幣の象徴性等々を繰返し説くのである、<sup>(15)</sup>吾々は先づ彼に於て二次の言葉を讀む、『客體の經濟價值は、客體が可交換的として立ち入る所の相互關係に於て成立するものとするならば、貨幣は此關係の獨立性を取得した表現である。經濟關係即ち對象の可交換性の中から、此關係の事實が析出せられ、かの對象に對して概念的な——然し可見的象徴に結合した——存在を取得することによつて、貨幣は抽象的財産價値の表示となるのである。』<sup>(16)</sup>と、Soda も亦同様に、實に嚴密なる言葉の意義に於ける貨幣は、內的、主觀的、非數學的、從つて統一的、心理的なる(價值の)現象の外的、客觀的、而して數的表現でなければならぬ、<sup>(17)</sup>と言ふのである。

此二著者は、貨幣に於ける非素材價值性を明かに認識するにも拘らず、尙他の論者と共に、貨幣は價值即ち職能價值を有つと言ふ強要に到達したのである。吾々の考へでは、貨幣は單に價值關係の表現手段であつて、其自身價值事物ではないとの觀念は、貨幣は價值を持つ事は出來ない、價值を持つては居ない、が價值であると言ふ解釋に導く。故に吾々は、貨幣を物其自身として概念し、定義しやうと欲するならば、それを價值の客觀化と解し且つ名けなければならぬと信ずるのである。

従つて貨幣は、經濟及支拂團體の内部に於ては、客觀化されたる價值であつて、人間の社會生活に於てつくり出され、其處で人間によつて事物の中に投ぜられた價值が、殆んど事物と人間とから引離され、對象化され、獨立化されたところのかの特殊の現象であるだらう。貨幣は價值の客觀化であり、従つて、——敢て言へば、——事物の性質の主觀化である以上、貨幣は自己に於て、言はゞ、實體となつたものを更に屬性として持ち得ないのは明白である。價值の此説明から、貨幣は價值であると言ふ事實から、日常生活に於て、貨幣は價值を持つと言ふ考へが生ずる所以も明かとなる、何となれば、此區別は獨り論理的、批判的考慮よりのみ生ずるからである。

故に吾々は、貨幣は價值であるが、價值を持つて居ない、と言ふ意見を以て、貨幣價值の本質の問題、貨幣其自身が價值を持つや否やの論争に關する觀察を終了する。所謂貨幣價值、適切に言ふならば、購買又は分配力、乃至は分配資格は、自然經濟的であり、貨幣單位の價值意味である、而して、それは、貨幣が時々購買し得る財の數量の中に具體的に存在する。故に、概念的には、所謂貨幣價值は、個人的、現實的表象に基かずして無數の賣買行爲より獲得せる一の意識内容である。然し乍ら、これを以つて、貨幣は個人に對して『無價值』なりと言ふことは出來ない、貨幣は價值であつて、支拂團體内に於ては、購買に際し讓渡せらるゝことによつて社會的生産物の分配を可能



ならしむるが故に重要なのである。故に、私経済的には貨幣を一ケの財なりと言ふも差支はないが、國民經濟的に觀察すればさうではない。

素材價值性並びに價值性質が貨幣の本質に屬するや否やの問題に關しては、意見が非常に區々であるが、數量説にはその極端が相集つて居るのである。此現象は如何に説明すべきであらうか。此見地よりする時は、此全問題は數量説の研究に對し大なる興味を有するのである。Schumpeterは、數量説は單なる貨幣論上の定理に過ぎぬ、然してそれは貨幣並びに貨幣價值の本質問題には觸れない、と言ふが、果して當を得て居るであらうか。

商品論者にとつては、説明は容易であらう。彼等に對し、數量説は、價值並びに價格構成法則の修正的應用、一般に財の價值は供給の増加に従ひ減少すると言ふ事實の證明に過ぎない。(18) 或は又、財の利用並びに價值は數量の増加と共に減少すると言ふ限界利用説の意味に於て然るのである。然し乍ら、現今通用する如何なる價值論も貨幣價值の變動を漏れなく説明する事は出來ないのである、必ず價值論は説明し得ない現象に遭遇するであらう、價值論の意味に於て貨幣價值の變化を説明せんとする貨幣學説は凡て皮相であつて貨幣問題の本質の深さに突入し得ないであらう。斯の如く、價值論は數量説の基礎を構成することは出來ないが、然し乍ら、他面兩者の間には非常に多くの接

觸點の存在する事を認め、兩學説を綜合せんとする試みを理解することが出来るであらう。

然らば名目論者は如何。彼等にとつては、所謂貨幣價值一般は存在しない。故に彼等は如何なる價值、價格論も數量説の基礎とはしない、されば *v. Mises* は、現在の名目的貨幣學説の特徴は、貨幣學説の主要問題、恐らくは唯一の貨幣問題、即ち貨幣と他の經濟財との交換關係を説明し得ないと言ふことにある<sup>(19)</sup>と論駁するのである。職能價值論者たる *Dröding* は、數量説を以つて、貨幣を價值ある財なりとする解釋の論理的歸結であるとし、指圖論者は、國內に於ける貨幣價值の變化を貨幣側の原因に基かしむる事は當然出來ぬ<sup>(20)</sup>とするのである。それにも拘らず名目主義者は數量説論者である。如何に解決さる可きであらうか。

余は再び此處に、經濟科學一般の意味に於ける價值論は貨幣論に存在するの餘地はないと言ふ意見を述べたいのである、何となれば、貨幣は決して價值ある財、評價の客體ではない、従つて論理上交換學的貨幣價值論は存在し得ないからである<sup>(21)</sup>吾々が貨幣價值と名くるものは、貨幣單位に割宛てられた財の量の價值に外ならぬ、此量の大きさ——一般的に言はゞ——貨幣價值が國民經濟内の貨幣量と共に變化すると言ふことは自明的であり、必然的である、而して價值、價格論によつて説明さるゝを要しないのである。それにも拘らず、商品論者も指圖論者も共に數量説を奉ずるとせば、

吾々は此現象に對し論理的綜合を企てなければならぬ。吾々はそれが全く遇然的ではないことを認めようとするならば、價值論と數量説とは必然に一ヶの上位法則の下に在ると言ふ歸結に達するのである、而して吾々は Simmel と共にそれを、質を量に還元せんとする生活の傾向、人間意志を超越せる實在の合法性と觀るならば、その綜合を發見し得るのである。<sup>(22)</sup>

余は、此認識によつて、あらゆる貨幣學説が數量説に集合する所以を説明し得ると信ずる。何となれば、Simmel が種々繰返し述べるが如く、指圖學説に對しては明かに此傾向は妥當するのである、即ち Simmel は言ふ、『貨幣にあつては質は専ら量から成立する』と、<sup>(23)</sup>或は『純粹なる經濟價値は、其量以外の何ものをも搜入することなくして、其量的關係から一切の可能的、特殊的形象が生ずる形體を獲得して居る』と、<sup>(24)</sup>また最後に彼は次の言葉を以つて一旦その所論を終る、『偉大なる生活の傾向——質を量への還元——は、貨幣に於て最も極端なる且つ唯一の徹底的なる表現に到達する』<sup>(25)</sup>と。

然して此生活の傾向は、價值論に於ても亦現れるのである、何となれば、如何なる形式の價值論にも常に——表に或は陰に——價值は量によつて決定されると言ふ思想が横つて居るからである、茲に於て、價值論の意味に於て貨幣價値の變化を説明し、多少は又數量説を一般價值論に従屬或は

並列せんとする試みが、常に企てられ、然もそれが事實可能である所以を理解し得るのである。若しも、文獻に於て、兩派の論者が、價格形成に對する貨幣増加の意義を誤斷するならば、それは、貨幣動態學に於ては、質を量への還元は特殊の方法を以つて行はれると言ふとの、誤解に基くのである、而して如何なる方法でそれが行はるゝかが、正しく數量說の問題を構成するのである。(2)

- (1) Geld und Kredit, S. 150.
- (2) Über Fragen des Geldwesens, S. 127.
- (3) Ebenda, S. 115.
- (4) Logik des Geldes, S. 63.
- (5) Erfordernisse des Geldes, S. 9.
- (6) Das Seld, S. 536—538. S. auch Anm. auf S. 32. dieses Buches.
- (7) Grunzel, Der Geldwert, S. 16.
- (8) Vgl. Elster, Seele, S. 22, und Jahrbücher f. Nat. u. Staat. 1921. Aufsatz: Vom Werte, den das Geld nicht hat.
- (9) Geld und Kapital, S. 19.
- (10) Ebenda, S. 20.
- (11) Jahrb. f. Gesetzg, Verw. usw., 1906, S. 351, 367, 369.
- (12) Ebenda, S. 359.
- (13) Philosophie des Geldes, S. 190.

- (14) Wert und Geld, S. 21.
- (15) a. a. O., S. 69; 191. u. n. a.  
Elenda, S. 86.
- (16) a. a. O., S. 14.
- (17) Geldtheorien seit Knapp, S. 118.
- (18) Theorie des Geldes und der Umlaufmittel, S. 50. S. Bendixen, Währungspolitik im Lichte des Weltkrieges, S. 130.  
Vgl. auch Grunzel, Der Geldwert, S. 25.
- (19) a. a. O., S. 107.
- (20) Vgl. Mises, Z. Klassifikation d. Geldtheorien. Arch. f. Sozialw. Sozialpol. 1917.
- (21) a. a. O., S. 291/294.
- (22) S. 269.
- (23) S. 294.
- (24) S. 294. — 靜的意味に於て——『貨幣素材問題』が『數量問題』に歸する以上これを理解することが出来る、Vgl. Ker-  
schagl in: L. Walras, Theorie des Geldes. Jena 1922 S. 9, 17 ff.
- (25) 貨幣——價値の客觀化、それは『物其自身』としての貨幣の定義でなければならぬ、職能は物『自身』の認識に對して本  
質的ではあるが、交換手段、價値尺度等職能定義は、貨幣の實在を漏れなく闡明するものではない、例へば鐵槌を、それ  
は一々の道具なりと宣言するも、尙鐵槌の實在概念を表はすことは出来ぬ、——従つて價値の客觀化は事物即ち貨幣表券  
の中に、或は振替貨幣即ち記帳の中に與へられる、而して、經濟内に諸自然的價値が存在する限り、價値の客觀化は生ず

るのである、換言すれば、貨幣造出に關しては、經濟内に財即ち現實的價值が投ぜられた場合にのみ貨幣は發生す可きである。

價値の客觀化としての貨幣觀は、一方に於て範疇としての貨幣と、他方に於て現實的貨幣表券——價値の單位が此概念規定を以て定義さるゝとも——との概念的綜合を可能ならしめるのである、範疇としての貨幣は價値の客觀化であり、貨幣表券は客觀化の具體的現象であり、價値(貨幣)單位は、貨幣造出に際し客觀化を規定する大きさである。